三國一夜物語

へ 13
3021
8ヒ

へ 13
3021
8

開明小説 春雨文庫 第四編ヨリ 近世の烈婦孝女乃傳説を引續キ出版 記しる面白き珍書あり

松村春輔編輯 復古夢物語 初編ヨリ八編マデ 出版 這ハ明治太平記の前篇にて嘉永六年亜米利加使節相州浦賀へ来舶以来明治元年伏見戦争迄委しく考るせる面白き書也

和田定節編輯 参考鹿児島新誌 半紙本 初篇ヨリ七篇迄全部十五冊 此書西国征討の始末を詳細に考るせる第一の実録あり

東京書肆 大島屋 弥左エ門町一二番地 武田傳右衛門

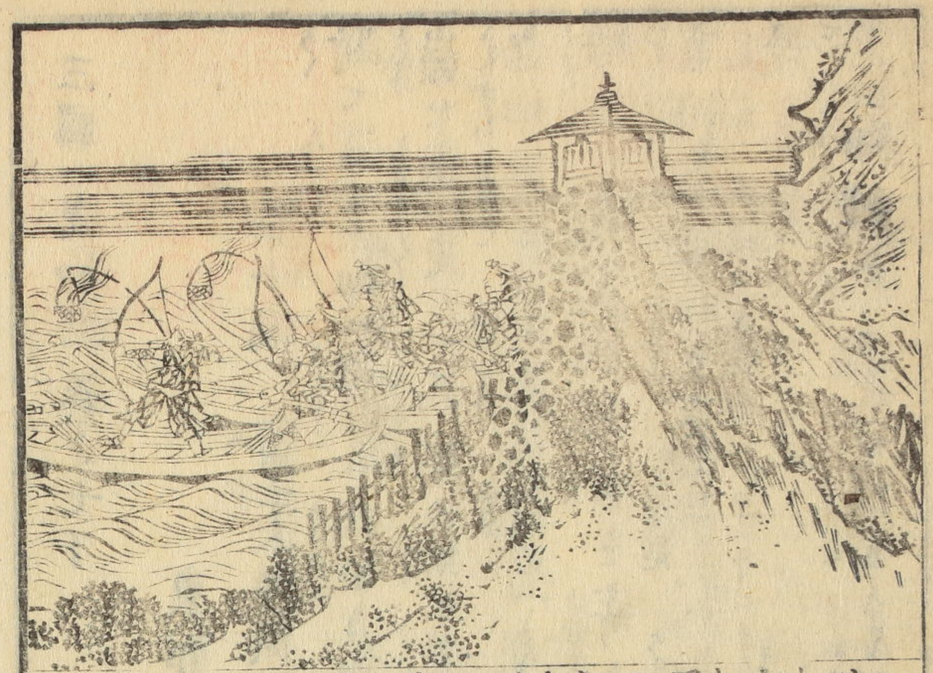
三國一夜物語 巻之七下

東都 曲亭馬琴著編

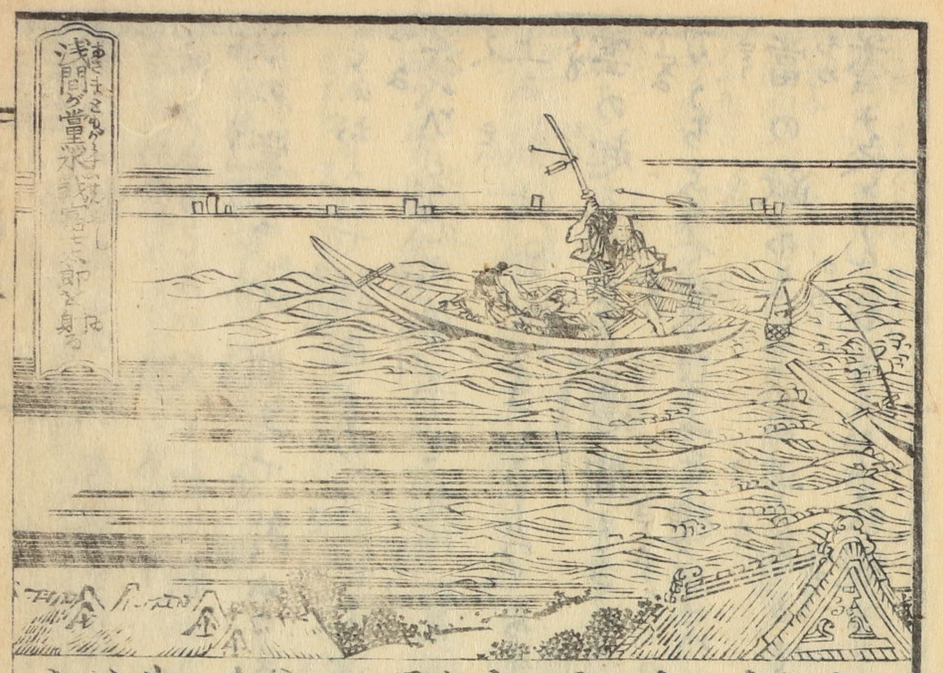
昭和九年一月一四日 購求

第十編 富士太郎孤島の仇を殲す事

斯て富士太郎ハ櫻子を扶掖き櫻子ハ叡太郎をうき抱き鳩白月巓を南へ走りて馬場の里を過りつゝ伊津の濱まで来りしが忽地寄手の大勢ハ行ゆくさうゝ。頃しも夕月影も入るゝの天結陰て暗けきどふり照き寄手の蕉火ハ晃星ハ異うらゞ。室積平馬肚甲高て真先の馬をきくまゝ。富士太郎ハ是家を喪ふ綱の裡の奥とうるり縦翅あり天ハ翔鱗あり水を潜るとも脱ぬ出る路もなゝ。項を



さー伸て刀を受よを呼いまゞ。富士太郎大ゐ怒りこと絶て汝ゐ用ゐー。やく退きて浅間を出せ。汝等よりーるき助太刀せんとて。可惜命を失ひそと。罵りて刀の鞘を捻ぬち。白眼つゐて立ちける。平馬聞てうち頷ちこの愚者舌長ー。あま打笛よを下知をまゞうけーゐつと回答もあゞぞ。る技つまて走りくるを



富士太郎ハ一歩もあゝぞゞ。右ゐ受け左ゐ受ー刀尖より火花を出ー。命を限りゐ戦ひあゞ。仇人照行ゆへのまゞあゞぞ。妻子も愁ゐ絆とるれゞ且戦ひ且ちつて稲富の郷まで来つるとき。薄疾あまゝ負ひーゞ。今いまゝまでゝと思ひゝそと見まゞ道のひとうゐる。柴の門の裡ゐ木兎の音聞ゆるゐぞ。

櫻子が抱きゐる。叡太郎をうひとりて。枝折戸ひらきもあへず。走り入り。こゝに父の仇と覈へんとまるものゐるが。許多助太刀の黨ゐとり圍まて。終ゐとろざーを遂ぢ。只今討死いたふおよびて雑きもの。ゐのゝ流石ゐとろぐつよゐゆゑ。ゐくまを養ひとりて。れ弟子ともれ覽ドとゐひきゐーと。ゐひ詑り竹塚の上ゐ叡太郎をうきゐろーゐ。ふゐびゐ外面ゐ走り出ゐ大勢雲の起るがごとく。透間もゐ追来ゐり。今ハ心やもーとて血刀うちふりて蒐ひゐを櫻子ハ忙しく引とゐ。ゐ物ゐ狂ひゐぶ。當の敵ゐもゐゐ平馬がともがゐと戰ひて。死ともゐ孰ゐ誉たぐらん。脱ゐゐがゐ脱ゐゐとも恥ゐ似て恥ゐゐぢ。命全ーて時を待再び本望をとげゐ。ゐとり腰を押て浦曲のゐゐゐ誘引ハ富士太郎ゐゐゐゐ其所を落延て黒崎の汀渚へ来ゐ。嚮昔敵撃船のゐれゐのまくにありゐ。夫婦閃ゐゐ蒐葉ゐて纜を切ゐゐひ渺ゐゐ海上へ浪のまゐくゐ漕出ゐ。時ゐ室津のゐゐゐ富ゐて螺貝の音高く笑ゐ十艘ゐまりの快船忽然と艤来ゐ。富士ゐ小船を中ゐゐ圍矢を射ゐゐゐゐ雨のごゐく。ゐ先ゐる船ゐ弓杖衝ゐく浅間照行立めゐゐゐゐゐゐ富士太郎諜者の告ゐゐゐ送恨ハ牛角ゐ母の仇箭一ツ受ゐゐゐゐゐゐ引放ハめゐゐゐ富士ゐ太股へゐゐと立を搖奪ゐく大ゐ怒り卑怯ゐり浅間左ゐゐ多勢を相語のゐゐゐゐ花道具をゐて撃んとゐゐも金石ゐ等し。ゐ富士太郎ゐ衣の裏ゐゐ

ちからく岩せとを叫びつく左右に舟の板子を把て搔きゝ右左に舵を
把て漕よせんとする折から四方より射くる箭に桜子も脇を傷られ
夫婦數ヶ所の疵を被りて進退自由ならざるに富士太郎嗟嘆して
なへに夫婦が死すべき日なり憐れ仇人に射すくめられ死羞を曝んとすれ
海底に水屑となりて怨を泉下に報ふべし桜子
がのろまを携て共に水中に跳ぶ入るるは怪しむべし夫婦のものは水
底へ沈むやらずくまでも浅りしに巖の端なるに疑ひ惑ふに
ものつらら咲て波上を走ることと流るくより速く首を回して彼所を
うかがへば照行が乘る船は間も遠くなりまさり蕉火の光もうすくなりに
なんぬ。まことに奇異の思ひをなしつゝ只命を天に任せて動もせられざる一瞬

の中にいくばく里を走りしかその夜も既に明けくるに一ツの島に着しゝかば。
桜子夫婦を載せて来りしものをうかがふ甲の長さ四五尺もあるらんとおぼしき
亀ゆくりなくありける富士太郎とをこと岩を丁と指とまとわく思ひ出せる
事あり曰く父駿河に在せし日三穂の浦にて海士の子がうち殺さんとする
亀を救ひとく放得させのよりと変つるがさてハ吾倚ぶ危難を救ひ頂て来
まるこの亀ハ命の恩を報ぜんとの事なりのゆへ〳〵ありて唐土の毛宝
曰く邦の如無僧都三年是亀を放をして亀又眞てその死を救ふ亀之
恩ハ忘るゝものをと思ひ人間の省とし父の仇人に後をゝ仇新島守となる
なんハいのひぐひをゝ悔うらあバ桜子もその理よいひ慰べき言葉もなく
おなじく涙にうるおひつく夫婦打浩に跡上ハ亀ハ海底に沈みゆく程

ふ夫婦のものハ矢傷を忍びて人住む里やあると索ねぶ。こゝに一箇の浦人なる逢ず窒ゝハ孔ひらの燃上つゝ磯ゝハ潮風吹あれて行客路人の迹もなくすゝ樵歌牧笛の声もせず白波ひゝ〳〵魂をけし青巖ゝづらゝ腸を断だりゝるに山ゝ硫黄のあり土ゝえて泉ハ湯ゝとなりて流るゝハ夫婦ゝ足を揉く咽喉を潤し身に侵して疾口を洗ふに痛頓に滅くゝこゝら清々ゝくゝりぬこの日海上よく晴て千里の外も見え渡ゝり活々ゝ海面をゝ定ず眺るゝ烟霞ゝ重ゝ五ツの湾七ツの浦もつゝ〳〵ゝ富士太郎妻ゝ對ひて薩ゝ浮ゝ五嶋ゝ七嶋ゝ十二の島ゝ多くゝ見ゝ鬼界を問ひ〳〵ゝハ鬼の栖ゝ今ハ硫黄の炎を吐ゝ硫黄ゝ島ゝ名ゝ彼俊寛成経泰頼の流ゝ足ゝ踏ゝ十二島

の中ゝ七千度白石硫黄ゝ島ゝ。件の島ゝを去ゝ数十里ゝ七。一ツの無人島ゝ。ゝ〳〵彼所の浮島ゝ五島七島ゝ。ゝ無人の島ゝ。ゝ粮ゝ。ゝ磯ゝ。ゝ十日ゝ活ゝ。元ゝ帰ゝ。ゝ魂空ゝ。ゝ屍ゝ沖津島山ゝ鬼ゝ。ゝゝ説ゝ櫻子ゝ。ゝ心ゝ。ゝ思ゝ。ゝ子ゝ見ゝ悲ゝ夫ゝ活ゝ。ゝ身ゝ。ゝ辯ゝ。ゝ磯辺ゝ立ゝ涙ゝ折ゝ見ゝ乾ゝ奥ゝ三ツ五ツ。ゝ砂ゝ。ゝ夫婦ゝ拾ゝ山ゝ出ゝ火ゝ奥ゝ食ゝ飢ゝ。ゝ夜ゝ島ゝ根ゝ枕ゝ。ゝ存命ゝ一日富士太郎ゝ。ゝ往ゝ年ゝ。ゝ田ゝ神ゝ霊ゝ諾宣ゝ死ゝ欲ゝ生ゝ告ゝ

違へず。夫婦が死んせまを命ひらへるるの今既さ三びるおそへば便るれる
者もゆらず。只顔生んを愚へバとそひ憂もめるべを共に命ハるたりのさ
そとの為に朽果んをくるるくさ思ひくえ魚と拾ひく粮をしの寓然
ヒ七日を送るに矢痍も程るく愈ーくバ只あけくをのをすをびさ斂
法を試るみぞ七百日ゆまりをる年ーさ髪ハ蓬を載く肢体衰へ顔黒
き夜の裙ハ乞ををく海松のごとくさるりぬを志遂に移らずーさ
ゆりるをぞさそも播州さハ室積平馬払て軍兵を起ー海陸をるさ騒が
せるを主君美則ふく憤ひ平馬ハさらるり。五人の属官赤を
召捕く厳ーく獄舎さ繋せ浅間照行ハ捌捉せんとるひーさ照行
ハをく攻寄ると大ニ怕れその夜の中に逐電ーと播摩を摂津の封疆を

下畑の東在家に深く隠れてありしを赤松の家臣ホも終にこれをちらぞ。浅間を搦捉りて後に平馬が黨を刑罰あるべしとて年い暮行ども。そのまゝゆて置まゝに次の年の二月下旬風雨烈しき夜に紛れ平馬い五人の属官を相語て獄屋を破り。ものゝともに脱れ出て津国へ走つる。翌朝塩屋の浦ゆて照行ゆきあひ。さらば便船しまゞ淡路へこそう。夫より肥後に下りて菊地をたのみて奉ハ公せばやるどうちうてひつて。俄頃に一艘の船を傭て七人とまふ乗移り。淡路を投て艚をる折しも海風忽地吹荒て大洋に漂ふ。三日ばかりに七處とを見るべきに富士太郎夫婦さまざまいへる。無人島に漂着せり。この時二人の舵人と一人の属官い船中ゆて死しぬ。照行平馬が徒ともて六人。ばかり島に上るを安

て船ハ巖に打當りて微塵に砕くうせぬ。是より見れば富士太郎夫婦ハ遂に彼船をたゞく大に歓びいとゞ帰るべき時至らんとて。其方をかちら眺て居たりしが仇人の船もあらざるべば桜子ハ夫に對て云ふ。

いとゆもあらで浅ましくなりぬるこの姿を彼の人々が怪こそ。鬼ともいとらまらんハ怕まで船をば寄すべからずゆ引退てこそ待ゆとゆバ富士太郎も諾りをく。二三町後方なる岳蔭なるの居たりる。只今船をうめざまる人をたるに仇人照行もその中にありしゝば天地を拜をく救び勇をよろゆく足を踏鳴して走つる出めぐらしゆ浅間左考浮木の亀に救はるゆこの島山に優曇華の咲めぐる春に会ゆ富士太郎知一るり勝負を決せんとて名告りけて刀を下に後放せば照行平馬ハ

三国志

三国志

太く驚きて思ひ寄ずも逡巡せしが。めでたきなれ助太刀すべき人もなし彼一人
坐ハ人をしも撃ん八易しと心ずに倚りし照行ハはやくも打笑ひ汝ハ黒暗にて
溺死せしと思ひしに今現にここにあるハ亡魂にてもあるならぬいで成佛さ
せてんと嘲哼つつ平馬にむかひ注目すれバさなくも刀を抜つれてまちくると
富士ハ去年より島にありても焦悴すといへど神助擁護の力失ハ
日來のまもられ勝れて踏とどまく挑み戦ひ平馬が細首打落しつ入すれバ刀ハ
三人の属官ハ深痍を負せおる一人を切て手その疾き電光の如く
如く照行の飛かくるを照行丁と受とめ浅間ハ風難の船に痍ま富
士ハ孤島の磯に寝へ百ゆえよろめく有ど太刀筋も定らねバ接
手ハ只身の外せく夜を次汗を握つきる已に闘戦時をうつし富士が

吭てあ太刀に照行ハ咽より乳の下まで切さげられ忽地撲と仆るるを。
案つけて首搔落せバ接子ハ扇そつくれよりて莞尓とうち笑ぬ時。
富士太郎ハ切伏せたる助太刀の三人をも刺殺し砂ある擂く仇人照
行が首を島の上に供ぬ夫婦合掌なして亡父母に告言し心がかりの
手向せり帰郷のくちうぐるへいをしバ此日應永元年二月廿五日の夜にて
ありけるに父右門が忌日に當てありけらずも仇を報ひし孝子の績
ともいひつべけれとしバ富士太郎ハ既に本望を遂たれど照行が乗
し舩ハ浪にうたれ巌に砕しかバいかにして帰るよしすがなしと思ひわづらへる
にあらんとて水際に一ツの大亀忽然と跂よりて夫婦のあなたへ向ひつつ。
甲を其方にさしむけたり是なん往にさきて乗せて来つる亀なりと

はそうまバ聊も疑ふず夫婦ハ感涙をぞながれ仇人の首を携て彼亀の甲に
坐せバ亀ハふたゝび海上を泛ぎ迸巻浪を凌て走るこの以前よりあれ速その
日の黄昏に播州黒崎の濱に着うるまバ夫婦ハ安堵て陸にあがるに亀に對ス
この褒のよろこびをのべ寔に汝ハ尋常の亀にあらず三穂明神住吉四社
の使者なるべしと云ふ堂々と合せく伏ゐめバ亀も名残惜しげにて遂
に水底に藏まるこの時富士太郎ハまづ當國の守赤松家に縁由を訴へ
答べしとく桜子をめぐりて稲富の郷まで来りしが往て叡太郎を捨
おもへ柴の戸に立よりて是ハ去年の十月許多の仇人に討圍まるに必死を究て
この菴に稚児を捨おもふる夫婦のあわれ久く名も知ぬ島に手らひ不
思議にも仇を逃て目今帰り着ていまだ児の顔をも一目見ぬ

一れをも覩えやさんとあわれ音づれ進らするに果して五十ばかり
尼法師ぞ叡太郎をとりて抱き障子押ひらきて走り夫婦ぞ異なる姿を見
て大に驚き慌ゝ入るを疑ひ惑ひて桜子ハ彼の尼をつくづくとながめ
村主兵介が妻の老曽ゝ母やとは思へば尼ゝ家ゝ母ゝ
とて桜子の世話をなすゝ妻の窠に果のひゝ
ふたゝびまゐらせゝと愚なる詞とをも傳ハ夫婦よろこび
無ずして裡に入りまづ叡太郎を抱きて親子慈母再會の感涙
ゝ桜子ハ富士太郎が支を老曽ゝ語ゝ彼せりゝ
父ゝの首より見まで老曽ゝ速ゝ老曽ハ且驚且うれして往事
堺ゝ姫を奪ゝ逃ゝ時深痍ハ負ゝ往方を素ゝ

に夫兵介のゆくへ索めあへず。それより播磨路を呻吟ひ。この里人に介抱せられ。
二三箇月にして病も愈しかバ再び紀州へ立かへりその年ハ彼の間是に
索ねて空しく暮しつるに。おぼつかなく夢見も悪しく。神籤責卜を考ても。
凶多くして吉すくなければ。そもこの世にて夫にも見えがたしと
思ひきえ。次の年那智の山に登りて尼となり法名を信徳と更て四国
九州を遍歴く行脚して。去年の秋播磨へ立かへりこの所に庵を結び書写
山法花山などへ詣るを身の務としけるが。ある時奇妙なる和子の事を
城山にて狼の害あるを救ひ。鳩ヶ嶺の麓なる家に関わりしが。
審に尋ぬるに富士夫婦も彼家ハ仇人浅間が隠家にて思ひがけずも索
ねし卯原を一刀に殺して。そのる子を救ひしる。妹小雪が夫の為に死せしを

高燈籠の暗号によりて平馬が党より圍まし一五一十或ハ口より或ハ
うち絶えて共にめやし此縁をぞ感じたる老曽の尼ハとまらの情由を聞
て手すく繋き偶救ひ得し和子を是らざる事とぞ仇人の毒手に陥るを
攤もらされつをうる事を進らせしことを越度なりと海佐の中まで富士太郎が
ゆかり否と云ハあらず尼が彼所に関わりしとまでゞぞそれかし仇人の在家を尋る。
加禰夫婦が危難に臨くといハずもがな児を尼よりこのかし二世の奇縁
竭さるところ是併尼が恩ひの為ずるのなりけれバその徳を賞せん
に今より麿太郎を更く尼が法名をそのまゝに信徳丸と呼ぶべしとて。
するちも新に名づけたる 信徳丸が別記に詳く知らるところなれバこゝに贅せず。その時拶子ハ庵の仏
擅を新の位牌に俗名浪江と記しつれバ夫と顔うちまもりて合せつ。

尼に對てその故を問ふ信德尼對へて
いはく。こゝに姫が出生のゝち母尼は乳母に名を
たゞ人に預けて養育せしめその沒の年より合戰絶る隙もなく女兒を頼
たる里祝夫婦も長門の府に移り住ませ
十年のあまりを經て後に告るまうの四郎が女兒は赤間関の長
が許に賣られたる名を浪江とぞいふ
彼里親夫婦も近曾死しぬ今嫡子なれば
ども叮嚀に物がたり〜後せつなどぞ世もいと悲劇くて合戰にいとまなく
わるまじ兵士の中に數くゆるぞ女兒が真の父は
て主君に遂に討死なりひ姫も落人なりの
出さで伴ひ去りぬ去年の夏尼が回国の序赤間関の長が許に立寄行て
くる遊女やゝ〜問ひしにその浪江は一昨夜人に殺されてこの
戒名をとり出でうん年〜に肝つぶして悲傷ありくこゝろけまぶ名告て今は甲
斐なきはけまぶ母子女兒をいとでその家を退出ぬ語るに袖ぞ濡るる
富士太郎も撥子も聞て哀れいやましつさは浪江は兵衛が女兒にて
ありつるその彼浪江を殺せしも浅間照行が所為なりとぞ小雪が最期にいひ〜
真ぶるに説示すば信德尼も耳を側てそ兵衛にひ浪江にひまる照行に教れ
ば過去の悪業きらんとぞうち驚きるくて富士太郎は次の日國寺の城に
参りて復讐の始末を演説〜室町殿より免許の御教書を披露して
ば赤松義則もて對面ゆり縁由を詳くくろく感じ〜ひ照行平馬は生

すでに罪人なり。又五人の属官ホも不忠不義のものぶもなりしを輙討ル
事。
哀なるかな。ことに満足せりと鈍頭に早馬をもつて使者を泉州堺へ
遣し、大内義弘ハこの由を告のべば義弘ハ前の約をそむぎ許多の家臣
を引て向て富士太郎ホ三人を迎へ来り年来の艱難昊亀の奇談をもて受
のべて感激に堪ず翌日富士太郎を将て上洛し。武将義満公へ仔細を
訟申さんとて往て預りて楽譜の一巻を高峯の大鼓を賞てすべて
富士太郎ぶるゐ一言を惜とて室町殿へ食く富士夫婦ぶ説志を感
ぜ剛ちく名を上く本領安堵の御教書を賜るのみならず。又命
下さるハ汝ハ武道の古実をも諳ぐくとり学び食ハ孝を楽を武と
ぶ〳〵一国に冠たるものぶらば今より三国富士太郎紀一を名告べし。

命で別に越前三国の荘を加恩ゆり便ち近従に召使ハる寛に愛に紀を誉
かりしその子信徳丸も孝順ハ父に劣らずして子孫長に繁昌せしをぞ。
富士太郎ハ宅地を洛中に賜るのち信徳尼をも頃よりて厚く扶持し。
又吉備の中山より故郷へ言傳せ。舊僕を召出して録数多を
田の夫廃へ詣ル吉三穂浅間大ぐく三所の神をも尊
信し翌年應永二年ハ合法衛衛の冒鬼堂を修飾して堂の傍
に地蔵尊を安置しなりしを人〳〵の菩提を弔ひとの復讐のため
僅に富士大鼓ゆりの謡曲の一章に記えく別に考据ゆ往昔ハくる
哀きかりけり。

三国一代物語　巻之十　大尾

ひとつの庵を大江戸の乾ふかうに彼松原とほく海をへ
富士の高峯彩霞ふかくこゝろ清けく人の樹
林ふかく御いにしへの街あるべし。彼原に蒼茫
郊原に蒼茫暗く林間想像ひとすれば
白水郎が唱歌耳に入る。芝浦の雜魚蒙々たる
沙場。漁客かよふ一里塚。往来人の絶ざる
後ひとつの門出ふ。その面影を遠ざかり。あゝ此時
生れあてたのしかふ喜ばしかふ。ほゝゑまる

ゆへ。ふるさとの郭公も棟にはつねて居つゝむこゝの
人をとゝうぶべく。ゆゑに清きこゝろ。さまこそ嘉ん日
閑あるこゝろ。樹のこゝろ。ふゆ枯て花の新すゝ寒
こゝろ。降こゝろ雪ふ跡つ雪て。汐こゝ人の往来深あ。
まゝて春ん山こゝ。ふるあるひとそ。おとゝぎ鳥のこゝろ耳
入あゝ。馬屋の蓑も同人あゝ。清こゝろ。林こゝ。
とゝの孫高こゝ。みゝ。風雨おゝ人樹こゝ。
けゝゝ行春こゝ。こゝ蓑こゝ。ほゝ

顯男の徳をうたふ歌なり。今浦地に住みし人の魂なりて。
人をうらみし人のあわれ。いとのこの人のうらみ世の
を歌はんかとおぼしき。おぼろ月夜の春の曙。
人かずまぎれなき夏の。あたりのまゝに思ひあり。秋の乃
おもひ出やらんふぶ。筆はすさびにまかせ。ふる雪
とうけみゞ〳〵。なびひ見〳〵ぎれかこと。ちぶりに遠ざかり
徳なく。濃き書ふとゝ。ひとのかりやなりやを
ものぞ。ゆゝ歌補ひ入〳〵。ものをうらん。漫ふ筆の出て〳〵すれば。

やうに五巻のとゝまれるこの源を
ものぞ。今こゝに。
を達。ふるの人の筆。漫の人又ふる書。
復くられとおもふ。ものを又筆すべきなり。
の面に移れ後にいたるべ書ものの濃げ眺むる。
文化七巳雪録の日。曲亭人うつす書

曲亭蔵書之印